

「薬草ガイド」 集客の特効薬

六甲山の頂に近い六甲高山植物園（神戸市灘区）の2016年度入場者数が、前年度比で2割も増えた。人気の要因は「薬効植物のガイドツアー」。薬草などに特化して植物を紹介するツアーに多くの人が押し寄せている。植物園業界は全国的に低迷傾向で、各園は集客イベントなどに頭をひねるが、六甲では特色ある企画が「特効薬」となっている。

（篠原拓真）



神戸・六甲高山植物園



①高山植物について薬効の面から紹介する神戸薬科大の沖和行さん（右）②神戸市灘区六甲山町北六甲、六甲高山植物園③沖和行さんが紹介する草花のガイド資料

「つぶして匂いを嗅いでみてください」。シラタマノキの白い実から、シップの匂いがあふれ出す。驚く参加者に神戸薬科大学薬用植物園職員の沖和行さん（65）がほほ笑む。「虫刺されのかゆみ止めになりま

す」。参加者は目を丸くしながら写真撮影したり、メモを取ったり。「高山植物の生きる力はすごい。その力を古来、人間も利用してきたんです」

「沖先生のぶらぶら園内ガイド」の一場面。08年ご

ろから不定期に行っていた企画展が人気を呼び、12年4月から定期的にガイドが始まった。月1回のガイド

は、1時間ほどかけて園内を巡り、時季の草花について解説する。「フタバアオイの根は鼻

炎の薬に使います」「キキョウはせきを止める漢方の一つ。風邪薬の『龍角散』でござ

は20〜30人の参加者だったが、今では100人ほどに。和歌山や大阪などからも訪れる。沖さんの横をかぶり

入場者2割増 薬科大職員が効能説明

レジャーの多様化などで全国の植物園は入場者数の減少などに悩まされる。文部科学省の統計によると、2007年度に約1362万人だった全国の入場者は、14年度には約1162万人まで落ち込んだ。

入場者数の減少とともに、閉鎖する植物園も相次ぐ。07年度に全国で121園を数えた植物園の数は、14年度には106園に。入場者数で15%

植物園、全国的には低迷

専門分野に特化 神戸の各園盛況

減、施設数でも12%の減少。日本植物園協会は「財政的に厳しい植物園は多い」とす。珍植物の展示やライトアップ。各園が来客数の増加のために企画展示や体験イベントなどに試行錯誤している。

一方、神戸市内には六甲高山植物園をはじめ、神戸市立森林植物園、神戸布引ハーブ園、神戸薬科大薬用植物園。「二つの市で植物園の種類が

つくように歩く人も多い。六甲高山植物園の入場者数は長らく8万人台で推移することが多かったが、ガイドの人もあつて16年度には10万1千人に達した。15年度の8万5千人から19%増。10万人突破は07年度以降初めて。近年で例を見ない数だという。

好調の六甲高山植物園。担当者は「ガイドの専門性が受けて、人が人を呼んでいる」とにんまり。一方、兵庫県内で「競争」する県立フラワーセンター（加西市）の担当者は「花の匂は

（篠原拓真）